



武家名目抄稿第一冊

旗幟部附録一 目錄

鳳凰御旗

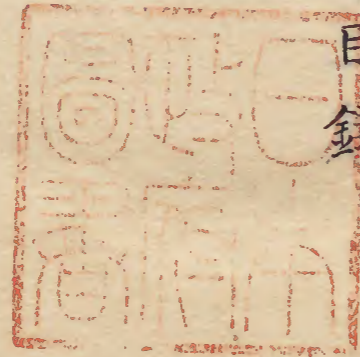
重代ノ旗

武田旗

紅霓ノ旗

佐字ノ旗

雁金ノ旗





四ツ結ノ旗

四目結ノ旗

三目結ノ旗

鐘ノ紋ノ旗

分銅ノ旗

雌雄狐ノ旗

蚊虻ノ羽ノ大拳之旗

大文字ノ旗

白地ニ黒餅ノ紋付タル旗

白旄ノ旗

陰符

角取紙ハレシ

金ノ丸ノ指物

黒四半ニ朱ニテ山道書タル指物

猪ヲ紋ニ付タル指物

ノホリ指物

乳付ノ長旗

朱ノ丸ノ旗

足輕旗

旗筒

大鳥毛輪拔ノ指物

大鳥毛ノ捺物

象戲ノ駒角行指物

酒林ノ指物

黄八幡ノ指物

ホウスキノ指物

紺角取紙ノ差物

猪鹿ノ指物

ムカテノ指物

差物ヲ受筒ニサス

金ノ三團子ノ馬標

ミタラシノ馬驗

角取紙小馬印

笠符

角取紙ノ笠印

片引兩ノ笠印

帆掛舟ノ笠符

三引兩ノ笠符

無紋ノ木綿幕

大吹貫

唐ノ頭

色々ノ旗

武家名目抄稿第一冊

旗幟部附録一

鳳凰御旗

叔井日記云

信長卿秀治宗貞江御對面之條

国司屋形秀

治公攝津国へ御進發中略御馬廻遊軍衆三

百七十騎御軍勢五千五百余騎ハ御本備

十リ鳳凰ノ御旗重代ノ御旗ヲ奉ラレテ

候軍監ハ平林平右衛門家經古市舎人範

包ニテ候御旗ノ指南ハ赤間九郎兵衛光

隆佐藤右馬允秀理堀江雲八景久等ニテ

候

重代ノ旗

叔井日記云 水上宗貞八幡 一番陣ハ赤松

次郎祐康備前守ト申ノ候相從ノ宗徒ノ

一族衆余流ノ人ニハ略 祐康重代ノ衆

ハ云ニ及ハス 御當家恩附ノ衆近比別所

殿ヨリ参ラレ候衆モ皆一陣ニテ候赤松

重代ノ旗ヲ進ノラレ并ニ大将家ヨリ下

サレテ候赤子ノ白旗ヲ開カレテ候

武田ノ旗

甲陽軍鑑云 信玄勿列ニ事ハ惣別ニ年己

未トモは此大事ト思ハ 咄ニ年ノ旨我死

ヲとくくく國を去つめハ 孫此儀を口

前むすま信勝十二景の時也智より其旨

は陸代を以て常務頼と申す。但武田乃旗
はゆきふく事なす。五月のまゝ。我そん
のほくお軍地帯の旗ハ幅大なる旗の小旗
いつまも一切なす。つゝなす。十の氣。く
家督初傳の時。その旗斗。あつた。此旗は
何もゆきふく事なす。

紅霓ノ旗

賀越國諱記云

畠田弥六退
治桂田條

大将 畠田カ其

日ノ出立殊ニ勝テ大多ク見ヘニケリ。端
牛ノ角ノ缺形ウツタルニ三枚シコロノ
甲ノ緒ヲシノ蜘蛛ノ尾ノ鎧ヲ着虱子ノ
皮ノ双ノコテニ海月ノ骨ヲ磨立テ輝斗
ノ袖ヲ付蟾蜍ノ尾ノ氷ノ如クナル三尺
五寸ノイカモノ作ノ太刀ヲ佩。蛆虫ノ皮
ノ臙當ノ雷電ノ光ノ如クナルコソリハ
ノ太刀指。紅霓ノ旗ヲサマセ。蠅蚤ノ小

栗毛ノ馬ニ具鞍置テユラリト乘リ飛カ
如クニ懸出ル

佐字ノ御旗

叔井日記云

永上宗貞ハ幡
山陣取之条

佐伯一族余流

ノ人々ヲ一日ニ助カアラレテ陣ヲ作ラ

セテ候其人々ニハ吉弘右近惟政佐伯小

四郎惟常略其勢一千余騎ニテ候コレモ

重代ノ旗ヲ立テレ大将家ヨリ下サレテ

テ候佐字ノ御旗ヲ進ノラレテハ候アツ

ハレ中国九国ノ大剛ノ勇士トモ互ニ家

ニ疵ヲ付マシキモノヲト思ヒ入レ命ヲ

ハ塵ヨリモ輕ク思ヒ義心ヲ大磐石ヨリ

モ堅固ニシテ一騎當千ト誓フテ候金鉄

ノ侍トモニテハ候

雁金ノ旗

その本字家物語云 額步備古法 兵衛佐治義

房昌美条

四年に院宣言余多病此令旨を給て候と傳ふに
うし給ひしに記昌考は二文字もむをひか
りか。の。を。と。給。て。切。を。此。に。有。り。ら。る
る人の中は其日大助の爵をば如く
ふるしうりたる者をやと申すに其後
かまらる及より九なり大吏刺友討と云ふ
故く是よりれたりの事多ふうらそんしんしん北
をさしと申すらるる

四ツ結ノ旗

藤葉栄衰記云 須賀川落 須田濃列ハ四ツ

結ノ旗サシ安藤服部小坂築山山寺長瀬

割鎖鉈柄ナトニ云フ武辺ノ者凡前後左

右ニ付キ隨ヒ馳向フ

四目結ノ旗

天正本太平記云 追討直義宣 去程ニ道譽

秀網敵ノ近附ヲ聞テ 中我身ハ舟岡山ノ

麓ニ控ヘテ敵何クニカト見繕フ処ニ五
郎左衛門尉高秀ハ早一陣ノ軍仕損シタ
リト覺シクテ四目結ノ旗ヲ秋ノ野風ニ
飛揚シテ敵御方ノ馬烟草ノ烟ニ争ヒテ
云々

三目結ノ旗

太平記云 山名父子
背尊氏條 南方西国ノ兵共一所

ニ打寄テ四條河原ニ響ヲ双テ控ヘタリ

北ヨリ遙ニ敵ノ陣ヲ見遣ハ鹿谷神樂岡
ノ南北ニ家々ノ旗ニ三百流翻リテ四目

結ノ旗 北條家西源院南
都本作三目結 一流真前ニ進テ

真如堂ノ前ニ下合タリ

鐘ノ紋ノ旗

會津西家合考云 摺上原
軍條 河原田治部少輔

盛次ハ内々檜原口ノ用心ニ大塩ヘ向テ

居ケルニ此ハ敵一人モ不來啣伊達ノ

陣ヨリ鐘ノ。紋書タル旗ヲ進メ其陰ニ大
勢ノ軍兵進ニ来ル

分銅ノ旗

板坂下毎慶長記云堀尾信澄等は太極の
おきくふらぬ並ひに信合戦と聞聞系へうけ
つける中山旗を二ツよまけそまふ馬を
そへ大いこのまや道をもふりそへりまはる
馬上三百斗もあへくくひふ西は降参方ハ

ぬりくまれしきけり此はくまは
サミハひももまはれぬの具さへおハ一系
まはるくまれおとる此はおとる汁ゆり
旗黒飛びりうけふとふ白きふんころあり
後炮より此歩約まかつくまはすは布障へ
をくとまはるへをうらる信澄書まは合
戦もるる

雌雄狐ノ旗

五 叔井日記云 攝州青野 大将主膳又討又ケ

テ高場ニ息ヲツキ 唯雄狐ノ旗フタナカ

レヲ立テ討モラサレ候兵ワツカニ百六

七十キニナリ物シツカニ存シツメタル

テイニテ陣ヲ立ルニ云々

蚊虻ノ羽ノ大挙之旗

賀越國諍記云 一揆等平泉寺攻落條 七山家ノ大将

ニハ 亀毛ノアセキ兵衛尉兔角ノ西ノ六

左衛門尉蛭牙ノ東孫左衛門尉虚亡ノ道

場ノ左近太郎同掃部入道々世岸陰ノ弥

次右衛門尉ヲ始トシテ山中ノ一揆ヲ引

率ノ各蜘蛛ノ網ノ甲ヲ着蚊虻ノ羽ノ大

挙之旗ヲ差蚯蚓ノ骨ノ桶皮綴ノ臙當ニ

鼠之角ノ鋏形打タル土龍ノ目ノカニヤ

ク計ナル親重代ノ三尺七寸ノ太刀ヲハ

キ塗篋夕ウノ弓蛟蝶ノ羽ノ矢束解テ押

クツロケテ出ケリ或ハ鯰魚ノ足ノ手戟
椽棒ヲ振テ出テ或ハ蝙蝠ノ尾ノ額金梨
地打烏帽子半ホウアテ萌黄糸綴ノ具足
ヲ着蟾蜍カ斧ヲ横タへ半風ノ皮ノ鼓ヲ
扣テ敵ヲ待カケ石弩筒ツキヲ放シ懸ケ
鉄炮頻ニ出ス云々

大文字ノ旗

甲陽軍鑑云天文十五年丙午築武田勝頼

公從生是は信云云曰番目乃由子信列伊云曰
郎の由事也信丹後信長之孫目あり武田
お侍の信の事を去給ふ信云云乃由信も十
五年此百子息太郎信王信勝世一宗もその
時代と号し〜〜〜此事を記す武田の法
信は終ふ持も終らす況信云云宗の由
幡も漢りせ給ハす元伊云云おは〜ます
時の方文字の旗也

松原自休手録云馬場カ七百ノ備漸ク不足八十人一条右衛門大夫兼來ル誓ノ勝頼ノ大文字ノ旗見引退馬場從長篠橋筋兼返シ名兼テ討死ス

難波戰記云 大坂勢備立付 白地ノ旗ニ大

文字銀ノ唐ウチワニ熊ノカワニテフク

リントリタル馬印ハ野々村伊豫守雅春

白地ニ黒餅ノ紋付タル旗

難波戰記云 八尾久宝寺表合戰條 藤堂仁右衛門同

宮内兼名弥次兵衛渡辺掃部介四組ノ軍

士八百騎前後ノ次第モ十ク白地ニ黒餅

ノ紋付タル和泉守カ旗ヲ前ニ立テ二騎

白三騎宛シトロニ成テ敵近ク押寄ケレハ

八尾堤ノ西マテ北人数ヲ引付長曾我部

ハ唐糸威ノ鎧ニ白星ノ曹ニ鍬形ホタル

ヲ猪首ニ着テ父元親カ讓リシニ尺八寸

ノ太刀帶テ地黄ニ黒餅ノ旗唯一流颯ト
指揚混曹三百余騎堤ノ内ヨリ東ニ向テ
吐ト喚テ駈出

白旄ノ旗

保えぬ語云々々々甲此法をくえてすま
ふうちいてけくくをむくへくくれなるぬ
の扇をむくたはくくくもさるる中
白旄の旗残なるひく黄旗のりくくくのく

やうきよんくくくくくくくくくくく
うりくくくくくくのいをふけく勇すんく
くくくくくく

陰符

叔井日記云 四国備前忍 毛利ノ大将分氏

ノ楚忽ニ候軍勢ヲハ今ニ出シ兼テ悪説
ヲハ天下ニサセラルニナリ此体ニテハ
場ナラシノ内ニ結句ハ逆寄ニモ仕ルハ

ク候今ニテハ喻ヒ大軍ヲ出サレ候氏手
筈ハ相違モスヘキカ御分別ノ有ヘキ丁
ト推参ヲ存シ候別所殿ヘモ参リテ近ク
ヨハレ密々ニ存分ヲ申上テ候ハ別所
殿モ齒嚙シテ與ヲサマサレテ候爰ニ陰
符ノ候ト出シ申候別所殿ノ申條ヲモ申
上テ候

又云 丹波家藝列モ 毛利殿一番陣ハ手筈
利家使若條

ノ刻信長羽紫ヘノ礼使并ニ人質トスノ
ヘテ播州マテ心易ク開^開所々ヲ開カセテ
出ラレニ番陣ハ大軍ニテ陸ト海トヨリ
取上ル手筈ノ用意ニ候其手合セハ夕カ
ヒニ忍ノ士ヲ遣ヒ陰符ヲ作り候テ時節
ノ相違ナキヤウニト念入申ニテ候

角取紙ハレン

大友貞庵記云 堅田合 匡徳をうき武志をく

波越北岸よりかく敵軍被破ふひくは幸あり
前より馬海道をわたり日列之河内へひのは
岸河内ふひくたるあひ川ちうんといふ
ときふりしつゝ此事をいれらんといふ乃
きしものさぶくあ川をちうくのさ名角
を紙をきんとうらくまゝ波越乃親者
をふりしつゝ清住乃新軍を白布を中借る
刀尋修の壞の要文をきんをく親念し

はくお我ちうらへ河も志あり只煙銃砲甲
挺波越北ふきはをさすり竹角口くわしを
家のあつち敷のみくふ多きをきく

金ノ丸ノ指物

難波戦記云 河野権右衛門卿 勘気卿 赦免之條 河野権右衛

門甲首ヲ持参シテ本多上野介ニ付テ披
露ノ事ヲ頼ム岫則卿前ニ被召出ケルニ
紺地ニ金ノ丸ノ指物ヲ指テ卿前ニ出合

戦ノ次第直ニ御尋アリ

黒四半ニ朱ニテ山道書タル指物

會津陣物語云松本勝ニ乗テ志村伊豆ヲ

追立逃ヲ城中へ攻入ケルヲ黒四半ニ朱

ノ山道書タル指物ニテ酒延越前守ト名

乗手勢二百計左右ニ立越前ハ大長刀ヲ

水車ニ廻シテ切テ出ル

猪ヲ攷ニ付タル指物

會津四家合考 摺上原 伊達ノ陣ヨシ鐘ノ

紋書タル旗ヲ進ノ其陰ニ大勢ノ軍兵進

ニ來ル 中 盛次カ即等ニ伊南源助ト云者

猪ヲ攷ニ著タル指物指テ向フ敵ト引組

押ヘテ首ヲ搔落ス

ノホリ指物

大友鳥居記云 和野之條 其ノ時十二月

二日親次中付らうは柏聖一人を

し先ず見焼てしう城あり。此。あり。き。し。の。と。
多。そ。へ。勢。は。こ。う。う。城。を。た。り。き。二。城。は。指。野。の。
東。西。北。尾。す。ま。ら。し。の。城。を。張。ふ。

安土日記云七月廿九日美景人数一万五
千計ニテ浅井居城大谷江参着候雖然此
表之為躰見及合戦難成存知高山大ツシ
へ取上候然ル処足輕氏ニ可責由被仰付則
若武者氏野伏ハ山ニ悉入ノホリ指物道

具ヲ取頭ニツ三ツ宛取候テ不來日王無
之高名之隨輕重被加褒美之間弥嗜不成
大形云々

乳付ノ長旗

平塞録云式部所存有テ旗ヲ呼返ス笠傳
右衛門所持ノ大旗并ニ江嶋与左衛門指
居タル圓居ヲ式部前へ立田中三郎左衛
門旗ノ支配ス西垣太右衛門ハ中村理兵

漸瀧田孫左衛門ヲ召連原口傳右衛門ニ
乳[。]付[。]ノ[。]長旗一本ヲサ[。]セ矢鉄炮ヲ不構
精力ヲ尽シ岩ノ上ヘ登リ石垣ノ破口ヨ
リ城内ヘ旗ヲ入レ小高キ所ヘ押立ケル
朱ノ丸ノ旗

世
兄聞雜録云今年十二月信玄駿河再乱令
沙汰運取[。]ノ案[。]ノ如[。]ク蒲原[。]ノ落城[。]ノ聞[。]ト
等[。]ノ早[。]ニ[。]存中入[。]ト案[。]ノ与力[。]ノ面[。]ニ

近[。]信[。]ノ[。]存中[。]ノ[。]燈[。]孫[。]信[。]敏[。]海[。]ノ[。]堀[。]を[。]さ[。]ら[。]へ
柵[。]を[。]掘[。]本[。]戸[。]を[。]掘[。]ノ[。]道[。]を[。]木[。]引[。]思[。]ノ[。]信[。]を[。]さ[。]ら[。]へ
旗[。]結[。]文[。]一[。]跡[。]も[。]不[。]跡[。]付[。]死[。]ノ[。]名[。]を[。]万[。]天[。]不[。]上[。]よ
若[。]其[。]ノ[。]多[。]ク[。]初[。]原[。]を[。]雪[。]ク[。]付[。]若[。]其[。]忠[。]心[。]天[。]ノ[。]リ
通[。]ノ[。]有[。]は[。]武[。]甲[。]万[。]正[。]二[。]体[。]も[。]三[。]体[。]も[。]追[。]及[。]ノ[。]大
乃[。]台[。]ノ[。]首[。]を[。]取[。]テ[。]其[。]上[。]ノ[。]畔[。]大[。]ノ[。]身[。]ノ[。]内[。]小[。]竈[。]を[。]掘[。]大
登[。]大[。]繩[。]十[。]斗[。]を[。]用[。]テ[。]一[。]ノ[。]安[。]部[。]川[。]ノ[。]砂[。]を[。]掘[。]下[。]人
新[。]合[。]力[。]ノ[。]事[。]ノ[。]十[。]日[。]五[。]結[。]付[。]事[。]也[。]矣[。]雜[。]玉[。]茶[。]也[。]云[。]々

たらはあふあふと屋まよくひらきあらしむる
あせ甲兵志ころろ肩底の骨締き強き引合ふ
敵の肌へ入ると弓張炮を堪難く油断するな
と下知し免追々の地下人も流石固形のとて
と感し氏志云への侍者言志特ある人々此と
あを送り酒を運心を流すも志也角とは知り
跡跡方炊か白地ふあふ丸。旗志先ふ押さるる

足輕旗

深秘篋底録云井伊直孝大旗小旗是恒旗
六具之儀ハふ及中鞆志志赤ク一の儀
中付山留け色後くくくくお遠山

旗筒

奥羽永慶軍記云須賀川須賀川楯裏ノ中
ニ矢部某真先ニ進ニ敵一人ツキ倒シ首
ヲ取ントセシヲ矢田野右近懸付ヲシ十
テハ引組ケリ矢田野力増リナレハ終ニ

矢部ヲ組止テ首撥落シケルカ我腰指ハ
組討ノ時折ケレハ幸ニシテ矢部カ小旗
ヲ取テ我旗筒ニ指馬ニ亦兼又敵陣ニ懸
向テソ戦ヒケル

大鳥毛輪拔ノ指物

平塞録云寂前内匠竹束ヲ越ル時大鳥毛
輪拔ノ指物竹ヘカミリテ拔ケルヲ家来
金光角左衛門是ヲ持テ来レ共指物ヲサ

スニ隙十カリシ故馬ヘサシカケテ郭ノ
中ニ乗込ケレハ右ノ手ヲ銃炮ニテ被打
貫左ノ手ヘ取直シ猶々進テ本丸ノ下ニ
着云々

大鳥毛ノ捺物

関八州古戦録云上方勢攻落
山中城條 中村式部サ
輔ハ岱崎ノ出丸ニ押懸タリシニ家人渡
辺勘兵衛了サレ廿九歳ナリシカ一氏ニ向テ

此地ハ峯々多ク聳ヘテ見切難キ所ナル
一、其前路ニ進ニ行テ一左右ヲ仕ルハ
シトテ山迹半月ト云徑一丈二尺有シ大
鳥毛ノ捺物ヲ捺シ大驪、
リノ逸物ニ乗テ打出タル有サマ只黒山
ノ揺キ出ル如クニ見ヘシ云々

象戯ノ駒角行指物

六十一
凡テ新編云々市田方稗多流之目之は新比

奈市之象同小阜人々如ク今川十一人
流之云々一寃者之勇士八人ニ討レ只一
人天也角右集之太曾之考之切拂之八
ヶ所之負あり之鑿之杖に付之立取り
之甲之眉底之年落一ヲ傍者あり付之云
一、角右集之彦之吐テ終不角右集之眉底
之方力之も鑿之も亦之のあり之
之河之于一之れ之不之于一之云々眉底

堂ハヤメヲトシテ云々

酒林ノ指物

奥羽七、四、六永慶軍記云 貞壁安藝守攻 先手ハ岡

見彈正益戸駿河同三郎三村与一信太兵

庫八代伊勢馬上歩者三百余人鎧先ヲ揃

ハ驀直ニ懸ル中ニモ岡見彈正ハ酒林ノ

指物也云々

黄八幡ノ指物

續武家宗法云信玄北條ト云合の時源海

々々少宗常陸介ハ黄八幡の指物を捨ひて

あり北條々々々常陸介も此方のいさふ

ひりあまは指物を捨てて逃げりとい信玄ハト云

形を知りて是を笑ふ信玄曰左指にてあま

定めし指物に指物を下人の居る所へ云々

云々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

云々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

やうのて巻を丸ひねりてきりて物と直田原
岐小孫の

ホウスキノ指物

松平記云松平昌久の敵小退りて
引くひりて大久保七郎右衛門同次方より水
野を過りて松平昌久の敵を退りて
鶉渡りて松平昌久の敵を退りて
松平昌久の敵を退りて

紺角取紙ノ差物

平塞録云城内サシ安堵シテ狭間ノ矢鉄
炮モ少ク烟モウスクナル故長岡式部城
ノ様子ヲ伺テ天晴宜乗時ナリ何レモ進
メト糸幣ヲ振立テ太鼓ノ拍子ヲカヘ頻
ニ打鳴シケル犬走ニ附タル諸勢ハ元ヨ
リモ好事故一同ニ又ミヒツシト乗カミ
ル即尅堀ヲ越へ本丸へ打入ケル一番乗

益田丈助紺一本シナハ角取紙ノ差物ニ
テ乗込東ノ石垣ノ上ナリ寂前日可ニテ
石ニテ曹ノ立物ヲ打折ケルカサモ不厭
右ノ石垣ヨリ乗上リ東ノ隅ニテ一揆ト
鎗ヲ合セ突伏テ高名ス

猪鹿ノ指物

續武家軍談云佐竹氏と小糸氏康ヲ隈境合
戦の時岡部権左丈松鹿の指物にて場中

の組討しき首を奪取立あつる指物なり
きは組討の由は指物おたつるを引敵捨ひた
つる也岡部世々念よ思ひ首を提げ敵引取
侍つる正面迎へ乗込の是は小糸家入下総の
岡部権左丈と申もの也時々の軍小組討し
く指物を奪取しきもの定まらば捨ひ給へる、
く指物ハ松鹿なりは首を奪取しき定まらば入す
是と習へ給へる、

然し其時武志一騎を以て至きしき津而
りし其時麻の指物関八が小孫一きしゆ人拾ひ
置りり出返すとき返りし其時國報を以て首を
渡し連乃芳志に背をむきし指物を以て
きし一礼ししき立返る

ムカテノ指物

甲陽軍鑑を以て其時武志一騎を以て至きしき津而
りし其時麻の指物関八が小孫一きしゆ人拾ひ
置りり出返すとき返りし其時國報を以て首を
渡し連乃芳志に背をむきし指物を以て
きし一礼ししき立返る

きはちしむのりも也

又曰時信玄軍中しむし津使の元十二人はむ

うし其時指物志也白地は其時しむかく

地は其時しむ書し其地は其時しむ

し其時面し其時しむし其時しむ

時乃其時使也

差物ヲ受筒ニサス

三、廿六、ウ
續武家因談云秀吉が秋有北良荒平といふ

多し陣をりしある邊にありしは、
肥後へ押送ふは、福富が加勢と
きり、あゝ流のあま、
にも、おど、交、
よ、結、
上方勢、
中を、
さ、

しと戒め、
しと、

金ノ三團子ノ馬標

関八州古戦録云 瀧川一益武藏野合戦 瀧川モ和田

表ヲ立テ金ノ三團子ノ馬標ヲ閃カシ武

上二州ノ境神流川ヲ押渡リ六月十九日

黎明武藏国金窪原ニ馳着西陣関ノ志ヲ

合セ弓鉄炮打遣へ射遣フル程コソア

播州佐用軍記云 十二月十四日合戦條 宇喜多掃部

助廣維三百余ニテ是モ二手ニ分ケ先キ

ハ弓ノ兵相交テ二百余人此勢ヲハ半町

計去テ黑白ニツノ角捕弒ノ馬印ヲ馬上

ニ押揚サセテ廣維隨兵代安寺三村高森

馬河ヲ始メ騎馬六騎西ノ手先ニ弓柄道

具ヲ持タル兵百計ヲ圍テ押出

笠箆

卅三十五 源平盛衰記云 法皇自天台山還御條 義仲ハ赤地錦

直垂ニ塗籠ノ箭負テ蒔劔ヲハケリ折烏

帽子黒革威ノ甲ヲ著シ笠箆ヲ左右ノ袖

ニツ附タリケル

角取紙ノ笠印

平塞録云忠右齋門直鎗ハ切折レテ文字

鎗ニ取カヘル鎗ノ録ニテ敵ノ首ヲ切落

ケルカ又々右へ折レテ犬走へ轉ヒ落ル

北節松山兵左衛門此處ニ來テ熊谷ニ言
葉ヲ替ス熊谷角取紙ノ笠印へ城内ヨリ
火ヲ投付シカヨクモへ付タルヲ松山是
ヲモミケシケル其外ニハ此所ニハ未一
人モ着ナシ松山働ノ段ハ熊谷証拠ニ頼
ミ申由申ケル

片引兩ノ笠符

太平記云

箱根竹下
合戰條

義助ノ兵共轡ヲ雙へ

三百余騎主ヲ討セシト懸入ケル義助ニ
度ノ懸ニ指モノ大勢戰疲レテ一度ニハ
ツトソ引タリケル是ニ利ヲ得テ義助尚
追北進マレケル處ニ式部大輔美治我カ
父ト見成シテ馬ヲ引返シ主從四騎ニテ
脇屋殿ニ馳加ハラント馬ヲ進メラレケ
ルヲ誰トハ不知片引兩ノ笠符着タル兵
二騎御方カ返スツト心得テヤサシクコ

ソ見へサセ給候へ御供申テ討死シ候ン
トテ連テ是モ返シケリ

帆掛舟ノ笠符

太平記云 長年帰洛付 今日ハ悪日トテ將

軍未都へハ入玉ハサリケレ共四国西国

ノ兵共数万騎打入テ京白河ニ充滿タレ

ハ帆掛舟ノ笠符ヲ見テ此ニ要^{ヨキ}彼ニ渡テ

打留ントシケレ共長年懸散テハ通り打

破テハ田ヲ出十七度マテ戦ケル

三引兩ノ笠符

太平記云 神南合 内海十郎範秀ハ此ル敵

ニ追スカウヲテ甲ノ鉢曹ノ総角切付々々

行ケルカ略弓手ノ方ヲ屹ト見タレハ噓

爽ニ鎧フタル武者一騎三引兩ノ笠符著

テ馳通りケルヲ衰敵ヤト打見テ馬ノ三

頭ニユテリト飛乗り

無紋ノ木綿ノ幕

續表家因法云大坂表掃部頭後陣屋のうま
ひ小太鼓乃幕と材色に漆きせ山く。多。紋
ふ。心。丸。し。こ。重。お。も。市。重。山。少。屋。の。か。こ。ひ。小
少。太。鼓。の。お。し。く。付。あ。は。足。越。山。お。よ。ハ。足。く
し。ふ。右。の。首。等。を。も。り。山。へ。は。人。の。あ。ら。ま。り。知
足。へ。ふ。り。山。足。も。ま。り。右。付。り。ま。り。く。く。ら。へ。ま
り。に。立。山。と。市。物。落。き。山

大吹貫

武蔵叢話云尾花全右衛門落印の太鼓を
きくか多分平塚と昔小塚下へ甘面も振
らす塚へとんり成内より鐘も力くくあ
ふ突

赤熊ヲ出セシ圓居

平塞録云右衛門佐殿黒田モ流石名高キ老人
ノ申事故尤ト有テ早速六具ヲメサレ曹

伊達日記云美隆ヨリ筑前サレ物ヲ最上
ノ美頭へ被遣候義頭彼筑前ハカネテ及
聞名譽ノ覺ノモノヨリ由被仰ク口地ニ白
馬梯ノ指物ヲ出羽ノ羽黒山へ納メラレ
候冥加ノ者ノ由申候

武家名目抄稿第一冊

明治十六年四月 日旧稿校正 小椋由久
同年同月十一日再校并昏 青山景通

同月十五日以旧稿逐一校
加朱畢

源忠韶

全十八年三月

校合

深澤政長



